

東京国立博物館 140 周年特集陳列

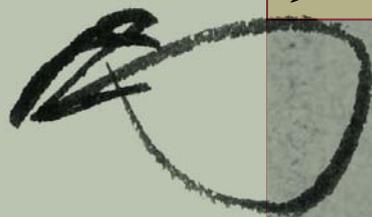
生誕 150 年 帝室博物館総長

森

鷗

外

總長



140th Anniversary Thematic Exhibition

Mori Ogai,

Director General of the Imperial Household Museum

150 Years since his Birth

はじめに

鷗外おうがい森林もり太郎たろう (1862～1922) は大正6年(1917)、帝室博物館すしよのかみ総長兼図書頭に任命され、同11年に在職のまま死去しました。その在任中、誠実にその職務を務め、創設から50年近くを経た博物館を時代の要請に応じた姿に改める役割を担いました。

この特集では日本近代を代表する文豪の、知られることの少ない博物館長としての一面を、館蔵の資料を通じて明らかにします。

Mori Rintaro (Ogai) was appointed as both the Director General of the Imperial Household Museum and the Director of the Imperial Archives in 1917. He died in 1922 while still holding these positions. During his tenure, he diligently carried out his duties and reformed the museum in response to the demands of the times, almost 50 years after the museum was founded.

Mori Ogai is a representative literary figure of Japan's modern era. Through materials in the museum collection, this exhibition highlights the lesser-known side of him as the director general of this museum.

平成24年7月18日(水) — 9月9日(日)

東京国立博物館 本館第16室

Wednesday, July 18 – Sunday, September 9, 2012 Room 16, Honkan, Tokyo National Museum

表紙: 森鷗外ポートレート (国立国会図書館所蔵)

帝室博物館総長就任

大正5年(1916)4月に軍医総監・陸軍省医務局長として軍歴を全うし、しばらく作家活動に専念していた鷗外森林太郎が、帝室博物館総長兼図書頭に任じられたのは、大正6年も押し詰まった12月のことでした。翌年早々鷗外は「帝室博物館総長兼図書頭医学博士文学博士森林太郎」として、再び上野の東京帝室博物館と虎ノ門にある宮内省図書寮^{テシヨリヤウ}を行き来する多忙な生活に身を投じることとなったのです。鷗外就任の政治的・行政的な内情を明らかにする記録は残されていませんが、すでに当代を代表する文化人として令名の高かった鷗外を起用することは、博物館の側からも期待されたのでしょうか。

総長の日常

長男森於菟^{もりおと}が「父は官吏としても忠実な事務家であったばかりでなく、居常最軍人らしく、恐らく宮廷の人としてもふさわしかったろう」(森於菟「時時の父鷗外」)と述懐しているように、鷗外は博物館総長として誠実にその職務に励みました。就任以来、一日おきに博物館と図書寮とに出勤することになっていましたが、当時を知る博物館職員の回想によれば、鷗外は朝早くから博物館近くのベンチに腰掛けて、開門を待ったそうです(『博物館ノ思出』)。「観潮楼」として知られる自宅があった本郷区駒込^{せんざき}千駄木町(現在の文京区千駄木1丁目、No.13、図1)から上野までは、市電か徒歩でわずかな距離でした。出勤途中に、結婚して谷中清水町(台東区池之端)に住んでいた長女茉莉^まの家に立ち寄ることもあったそうです(森茉莉「刺」)。ちなみに図書寮への通勤は市電で、本郷肴町^{さかな}(現在の文京区向丘2

丁目)まで歩いていたようです。

出勤すると、総長の決裁を待つ多くの文書類が待ち構えていました。鷗外は文書の総長決裁欄に花押(表紙)を据えしました。現在まで伝えられた鷗外総長在任中(大正7～11年)の文書はかなりの数にのぼりますが、大半に鷗外の花押があり、その決裁を経たものであることがわかります。また本務の他に、帝国美術院長、臨時国語調査会長、古社寺保存会委員、美術審査会委員などの公職に就いたので、次第に健康の衰えていた鷗外にとっては激務であったでしょう。

さらに、総長の職務の一つとして奈良・正倉院^{かいひ ほうりやう}の開扉・曝涼がありました。毎年秋の一時期に奈良に出張し、宝物の点検・調査に立ち会ったのです。これも亡くなる前年の大正10年まで欠かさずその役を務めました。正倉院宝物を紹介した『正倉院の栞』(No.3)には序を寄せています。

大正の時代相と博物館の変化

鷗外の総長就任直後の大正7年は、物情騒然とした年でした。世界的には、前年以來のロシア革命によってソビエト政府が成立し、ヨーロッパにも革命が波及して第一次大戦の終結を導きました。日本国内では、都市への人口集中が進むとともに貧富の格差が拡大し、7月には米価の高騰をきっかけとして全国に米騒動が起きました。デモクラシーの機運が高まり、本格的な政党内閣である原敬^{はらたかし}(1856～1921)内閣が成立しました。

明治5年(1872)の創立以来、そろそろ50年に近くなっていた博物館は、当時の人々にとってもやや時代遅れの存在とみえていたようです。鷗外就任直後、雑誌『中央公論』に掲載された高島米峰^{たかしまいほう}「新任博物館総長森林太郎博士に与へて博物館の

革新を促す」では、建物^{たか}が貧弱で専門家の研究や一般人の理解のための刊行物もないと指摘されていました。

当時、帝室博物館の業務には動物園や上野公園の管理も含まれていました。公園に足を運ぶ人は次第に増え、来園者を相手にした茶店やレストランが博物館から敷地を借りて営業していました。また、種々の博覧会も相次いで開催され、それを宣伝する新奇な広告塔(No.9、図2)が公園の回りに立ち並ぶようになりました。博物館にとっては風致景観を害する存在として頭の痛い問題だったようです。

総長鷗外の業績

博物館の学芸面では、まず、展示の改革が総長主導で行なわれました。それまで分野ごとに区切られていた展示室を時代別に編成し直し、歴史的な流れで鑑賞できるようにしました

図1: 山梨県在住の学者・弥富破摩雄からの作品寄贈を打診する書簡。千駄木の自宅に届けられた。

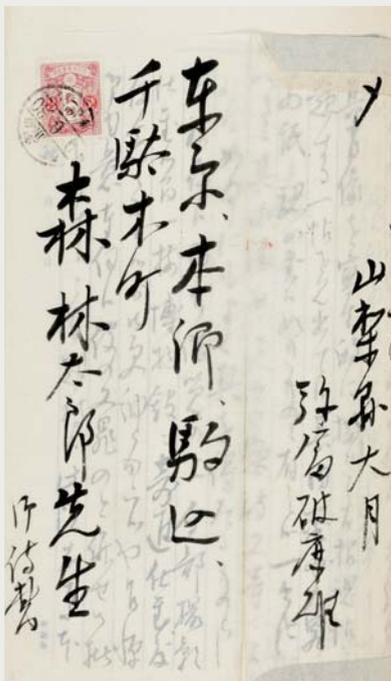
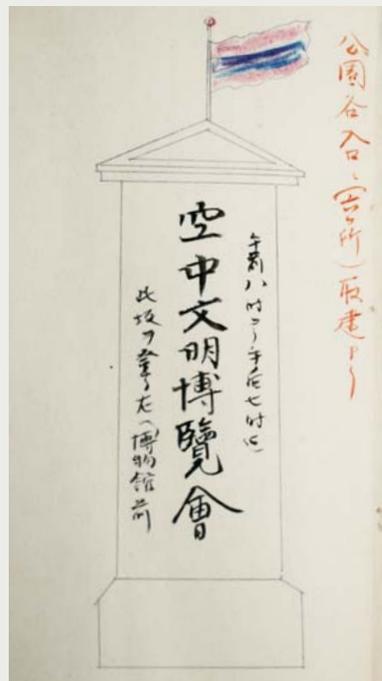


図2: 上野公園で開催された「空中文明博覧会」の広告塔。この種の広告に博物館は悩まされた。



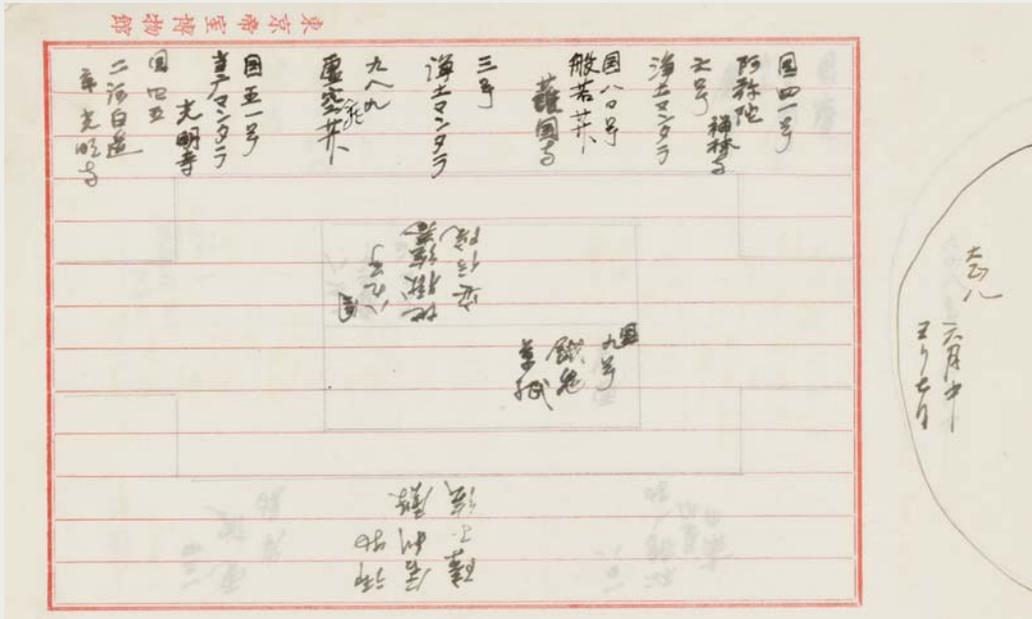


図3:大正8年6月から7月の本館陳列案。仏教美術を主に平安時代の作品が並ぶ。



図4:三越百貨店を通じて申し込みのあったフランギンの版画寄贈について、鷗外は社長からの手紙に眼を通して

(No.6、図3)。実効性を確保するためでしょう、それまで各部署に任されていた展示替の内容を、必ず総長への伺いを経るよう定めています。

博物館で学術的な調査研究を行ない、成果を公開する体制も進みました。所藏品台帳の公刊は前総長時代から準備されていましたが、この時期に集中しています。また『帝室博物館学報』(No.5)が創刊され、「正倉院楽器の調査報告」「欧米美術館調査報告書」といった次代に残る成果が公になりました。

コレクションの充実については、英国のフランク・ブラングイン(1867～1956)の版画作品や「神谷バー」創始者・神谷伝兵衛(1856～1922)による陶磁器の寄贈は、鷗外時代の成果です(No.11、図4)。あまり知られていませんが、鷗外自身もいくつかの作品・資料を博物館に寄贈しています(No.1・15・21～23)。

鷗外はその史伝からも明らかなように歴史資料に造詣が深く、公務の傍ら博物館の所蔵する典籍類を丹念に調査していました。その成果が「博物館書目解題」「博物館蔵書著者略伝」(No.16～19)で、解題・著者伝記として現在でも有用です。

行政官として

大正7年3月に起案された一通の文書で、東京市内の貧困家庭を対象とした小学校に通う児童の博物館入館を無料とするという、かなり長い起案理由を付した伺い(No.7)がなされています。この夏に米騒動が勃発したことを考えると、社会問題や労働問題に深い関心を持っていた鷗外の発意を想定することは可能でしょう。

また博物館を含む上野公園の敷地は帝室林野管理局の管轄下にあり、いわば皇室の私有地でしたが、一方で市民が自由にひとときを楽しむ場所としての公園でもありました。両者の間にどのような制度的な整合性を設けるべきかを論じた「上野公

園ノ法律上ノ性質」というペン書きの草稿(No.10)が残されています。大正9年の年紀がありますが、整然とした論理構成と時々現れる断定的・論争的な文章の筆者は、無署名ですが鷗外自身と考えられ、新出の手稿になります。先に述べたように公園の変化は大きなものがあり、何らかの整理を試みる必要があったとみられます。

鷗外は、博物館を取り巻く社会的な動きに対して、行政官としてもきわめて誠実に対処しようとしたといえます。

死去

大正11年に入ると鷗外の健康は急速に悪化し、自分でも死期を自覚するようになりました。6月には病床に伏し、もはや出勤はかなわなくなります。7月6

日には生涯の親友賀古鶴所(1855～1931)に「余は石見人森林太郎として死せんと欲す」という著名な遺言を託していますが、同日付で起案された文書案の総長決裁欄には「病氣中」という書き込み(No.20、図5)がみられます。

大正11年7月9日、鷗外は総長在職のまま死去しました。享年60歳。その死は当時ドイツ留学中であった長男於菟の名で博物館へ届け出られました。

田良島 哲
[当館学芸研究部調査研究課長]

図5:大正11年7月、総長の不在を物語る文書の決裁欄。



展示リスト

No.	名称	員数	作者等	時代	列品番号
1	緒方洪庵追責之碑拓本	1枚	森林太郎撰 日下部東作書	明治～大正時代・20世紀 [原本:明治42年(1909)]	森林太郎氏寄贈 P-1568
2	山房札記	1冊	森林太郎著	大正8年(1919)	図書281-8
3	正倉院の栞	1冊	小野善太郎著 森林太郎序	大正9年(1920)	図書102-88
4	絶代至宝帖	1冊	森林太郎序	大正8年(1919)	図書122-C82
5	帝室博物館学報 第二冊	1冊		大正10年(1921)	図書000-12
6	陳列品目録及陳列案	1冊		大正時代・20世紀	館史資料277
7	例規録 大正五～七年	1冊		大正5～7年(1916～18)	館史資料600
8	例規録 大正八～十一年	1冊		大正8～11年(1919～22)	館史資料601
9	重要雑録 大正七～十五年	1冊		大正7～15年(1918～26)	館史資料688
10	上野公園ノ法律上ノ性質	1冊		大正9年(1920)	館史資料1605
11	列品録 大正七年一	1冊		大正7年(1918)	館史資料446
12	列品録 大正八年二	1冊		大正8年(1919)	館史資料451
13	列品録 大正九年一	1冊		大正9年(1920)	館史資料454
14	列品録 大正十年	1冊		大正10年(1921)	館史資料456
15	十手	1本		江戸時代・18世紀	森林太郎氏寄贈 F-16696
16	鷗外遺稿博物館書目解題	12冊のうち	森林太郎著	大正7～11年(1918～22)写	QA-3586
17	鷗外遺稿博物館蔵書著者略伝	3冊	森林太郎著	大正7～11年(1918～22)写	QA-3585
18	鷗外遺稿博物館書目解題(未刊)	20冊のうち	森林太郎著	大正7～11年(1918～22)写	QA-3594
19	鷗外遺稿博物館蔵書著者略伝(未刊)	1冊	森林太郎著	大正7～11年(1918～22)写	QA-3595
20	大正十一年京都奈良両館録	1綴		大正11年(1922)	館史資料1838
21	ピン入	1口	ブラジル・アマゾン河畔 パラ産	制作年不詳	森林太郎氏寄贈 TK-3076
22	苗族風俗図	1幅		清時代・19世紀	森林太郎氏寄贈 A-9947

【参考文献】

東京国立博物館編『東京国立博物館百年史』1973年

東京国立博物館編『東京国立博物館百年史 資料編』1973年

森林太郎著・木下空太郎他編『鷗外全集』第35巻・第36巻、岩波書店、1989年

山崎一穎「帝室博物館総長兼図書頭時代の森林太郎・鷗外」『森鷗外論攷』おうふう、2006年

須田喜代次「帝室博物館総長兼図書頭時代の鷗外森林太郎」『位相 鷗外森林太郎』双文社出版、2010年

お知らせ

台東区立書道博物館 企画展 **中村不折コレクション「この人、どんな字?—近代日本の文豪たち—」**
(2012年6月28日～9月19日)にて森鷗外の筆跡をご覧いただけます。ぜひ、あわせてご鑑賞ください。

[住所] 110-0003 東京都台東区根岸2-10-4 [電話] 03(3872)2645 [ホームページ] <http://www.taitocity.net/taito/shodou/>

平成24年7月18日発行

執筆:田良島 哲(東京国立博物館 調査研究課) 撮影:長谷川恵(東京国立博物館 列品管理課) 編集:東京国立博物館 企画課出版企画室
デザイン・制作:D_CODE 発行:東京国立博物館 ©2012 東京国立博物館

